万物一体にして、天地同根

1

山岸巳代蔵はその死に際して、脳出血による激しい頭痛のうちに「みんな好きや、仲よういこうな」と言い遺すとともに、その三十分前には、「本当の本当は通じないままに死んでしまうのかな」と告白している。

「本当の本当」とは、何が「本当の本当」であったのか、抽象的一般的なことなのか、それとも具体的事実的なことなのか、遂に今に至るもわからないのであるが、何れにせよ、山岸の真意は明らかにされないままに逝ったということになるのである。晩年には山岸は『正解ヤマギシズム全輯』を著すべく、直接運動からも手を引いて体を空けていたものの、天は無残にもその時間を与えなかった。

したがって今われわれが山岸の思想として触れることのできるものには、山岸の大半の文章を収めた『山岸会養鶏法』と『ヤマギシズム社会の実態——世界革命実践の書』の二著と、あとは小冊子、当人の発言を収めた僅少の録音テープ類、周辺の人々の聞き伝え、山岸の遺した機関としての生活協同体（試験場、実顕地）、養成機関（特講、研鑽学校）があるばかりである。

これらのいわば限られた材料によって、山岸の「本当の本当」を類推せねばならないのであるが、

第一、本家の山岸自身僅かな年数の間にも考え方の変遷というものがあり、晩年には福里ニワに、「これまでの書いたものは全部焼き捨てて、書き改めたい」と洩らしていたそうであるから、既存の文章といえども、どこまでその通りに受けとっていいかわからないのである。

山岸と直接接触した人々による聞き伝えにしても、同じことである。その受け取り方はみな断片的であり、解釈は多様であり、甚だしい聞違いも少なしとしない。山岸の養鶏書の中には、その寸法通りつくると勘定が合わなくなってくる記述があるそうであるが、信じやすい相手には、本心とまるで反対のことを述べたりするのが山岸であった。

かくして真の山岸ズムなるものは「何が何やらさっぱりわからん」ということになりかねないのであるが、しかしこれら抽象的、具体的材料によって暗中模索の裡にも努力していると、少しずつ見えてくるものがある。基本的性格、輪郭だけはわかってくる気がする。山岸ズムはいわば応用の理論であって、一見複雑奇異にみえて、原理がわかると意外と単純な仕組みになっていることが読めてくる。山岸自身も、「原理さえわかれば簡単なんだ」と周囲の者に再三説いているのである。

しかし、それにしても私の前に次第に全貌を顕わしつつある山岸ズムは、あまりにも茫洋としていて大きく、かつ深いのであるが、究極のところ、私が理解した山岸ズムはインドの聖哲ガンジーとともに〝真実（サティヤ）〟の一語に尽きるのである。（注1）

山岸ズムの最奥は〝真実〟を求めることにあり、〝真実〟を以て成り立つイズムでしかない。そのことは、私がいうより、当人自身が述べていて、「ヤマギシズム社会を、最も正確に、簡明に、云い表わすものは『真実の世界』であります」（『実態』）と定義づけている。

ただし一口に〝真実〟といっても、それは恣意的な真実ではない。科学的な、それも自然科学的に

結論される〝真実〟である。しかも宗教的に非ざる科学的な〝真実〟の体現者をもって〝無我執人〟とし、その集団を「幸福社会」と呼んだ。

山岸自身は自己のイズムを説明して、「一個の総合哲学である」と述べているが、「総合」とは人間の総てという意味ではない。彼はそんなちっぽけなものに、かかずらわっているのではない。人間を含む全自然を包括するが故に「総合」なのである。単に人間主義（ヒューマニズム）にとどまらず全宇宙意識（コスモポリチズム）であるが故に、自然存在の論理を基礎に据えざるを得ないのである。

ところで、そうした科学的思考法を説く山岸巳代蔵であるが、これが先にみたように十七の少女顔負けの大変な情緒人間（センチメンタリスト）であり、生臭坊主ふうの傍観人間（マテリアリスト）である。のみならず、全人一体を説きながら極めて個人的な自由人であり、閉鎖的な孤独者でもあった。

山岸会発足当時の山岸の動きは、大抵は側近の者数人と隊をなして出歩いているのであるが、時にはあたかもたんぽぽの種のごとく、飄々と風に乗って一人で漂っていることもある。「ちょ、ちょっとそこまで……」といって、一旦山岸が隊を離れると、一体どこへ何しに行ったものやら、いつ何時に帰ってくるものやら見当もつかぬことだったという。

大阪の寝屋川の一会員が、偶然出歩いていて山岸に出会った。それで路上で立話をして、自宅に帰ってみると、沓脱に山岸の履物が置いてある。それで「ああ、センセ来てはるのやな」と奥へ呼んでみたが返事がない。おかしいなと家の周辺を探してみても姿形が見えない。それにしても確かに履物があるのだからと、家中の部屋を探してみたら、先生、寝間で自分で押入れからふとんを出してスヤスヤとおやすみ中であった。「実に気楽なお人どしたなあ」と、その会員は語っていた。

山岸自身は、「会報」（創刊号）で、

「われ、ひとと共に、が全国会員間にもっと深まり、会員間の通信が、交流が、バッジの光る処、皆わが家となり度いものです。全国どの地へ行っても、食と宿で迎え合う、親しい温かい心が待っている。全世界はわが家である広さが人を豊かにします。金銭の授受が、物品の謝礼が必要なものはだめです。人を泊め迎えて話す余裕位は省力養鶏、養鶏成績の余徳で充分余るように、仕組んであるつもりです」（「本会の現状を検討しましょう」）

といい、ついで「東北の会員の家族が温暖地の会員の家庭で、農地で冬を生活し、夏は暖地から避暑を兼ねて冷涼山地に健康を楽しみ営む、そしてお互の技を練り心を磨く、こんな世界のあることをよく識り度いものです」と述べている。

この微風のごとくあけっ広げで、一所不住の山岸が他方では寡黙不活発にして、人づきあいの悪い孤独者でもあったことは、これまでの文章によってもうかがわれよう。

話の内容がわからないこともあって、子供時代にも友人がいなかったことは当人自身述べているし、長じてからも殆ど心を開いて語るに足る友はいなかった模様である。周りの人間の方がむしろ彼を異端視して、つきあいを避けてもいた。養鶏組合時代の山岸について、「その頃の山岸さんは組合の人たちに〝あれは共産党で変わり者だ〟と噂されて、殆ど人とのつきあいはしていられなんだ」と、かばくひろしは書いている。

こうした山岸自身の人間的性情と彼の編み出した超人間的理論の関係であるが、本人は「自己弁明」として人間と理論とを切り離して考えてくれといっている。仏教にいう「法（ダルマ）に依って人に依らず」であろう。

しかしそれはそれで宜しいとして、人と思想が切り離せるわけもないことも事実である。山岸ズム

は山岸巳代蔵あって生れた。山岸巳代蔵とは山岸をなすすべてであり、山岸の性情がその理論構築の背景をなしている。即ち、彼の極めて開放的な自由人的性格、そして徹底して内省的孤独者の相貌が、彼の全理論の酵素的役割をはたしているとみられる。その何よりもの実証が養鶏である。

山岸式養鶏法で育てた鶏は、大変おとなしい。人間に人格というものがあるのだから、仮に鶏にも鶏格を認めるとすれば、山岸会の鶏は、良家の坊ちゃんのごとくおっとりしていて、ときに王者のごとき風格を具えている。他の鶏舎の鶏のように騒しく鳴きたてるということもしないし、餌を争ってガツガツすることもない。まして互いの尻をつつき合って羽を抜き、遂には相手を死に至らしめることもない。山岸式では余程気性の荒い鶏でも、口ばしを切るということをしない。

同じように、現在山岸会北試（北海道試験場）では数百頭の牛を飼っているが、この牛群も外見はすごくのんびりしていて、ゆったりゆったりしているのである。決してあわてて走ったり、大きな声を出したりはしない。文字通り牛歩そのものの生活を行っている。

一体こういう鶏や牛たちは、どうして生れたのかということであるが、ここに山岸式があるので、要するに基本は〝自由〟を主体とする仕組みの中で育てられているからである。卵からかえった雛は屑米の山の上に置かれて、いくらでも自由に、食べたいだけ食べさせておかれる。同様に行動も、起きたい時に起きて、寝たい時は寝させてやる。一斉に寝ろともいわないし、雛の起きる時間を定めておくわけでもない。牛群においても同じで、食べたい時に食べ、寝たくなったらいつでも寝られるし、運動したければ、したい放題の運動がいつでも出来るように仕組んであるのである。

つまり山岸の自由気ままな人格が、そのまま鶏牛に投影しているのだ。山岸は「自分の仕度い放題の事をして楽しみ、遊び踊って（私の日常は踊り）悔なき生き方で、この途ならニッコリ笑って死ね

そうです」（『養鶏法』）というが、同じ思いを鶏牛にもさせたかった。その結果、争いだの妬みだのといった性（さが）を知らない、それでいて産卵率も搾乳量も多い鶏牛を育てることができた。

これをいうならば、人間と鶏牛双方のなまくら生活である。人間は、鶏牛が気楽であることで自分が楽をし、反対に鶏牛は、人間が気楽であることで自分も楽をしている。互いに気楽の相関関係になっているのである。この在り方を山岸は説明して、

「その一つは、その限界を定めて、お互いにその線を越えないこと。今一つは、他を侵すことの浅ましさ、愚かさに気付くこと」（『実態』）としている。

これは、幸福社会＝即人情社会をつくるための条件として挙げている、三つの方策のうちの二つであるが、各々が限界を設けてその限界を越えぬことが要求されている。そのことが、ひいては他と己の自由を認め合うことにつながり、互いの生き方を最も生かし、持味を称揚する結果になるとした。

山岸がこれまでの既成概念とは逆に、原則として、農夫は農場へ入ってはならないとし、鶏飼いは鶏舎へ入ってはいけないとするのも、この原理に基づくものである。植物にとって一番大事なのは根であって、乱りに田圃へ入って根を痛めることはよくないし、鶏は一週間くらい放置して旅に出てもかまわないのである。

同様に人間社会にこの原理を当てはめれば、教育指導の問題はあるにしても、親は子供の領域に干渉すべきでなく、子供の勉強部屋に乱りに入ってはいけない――となる。各々は本分を守り、本分に生きる。学生は学問をすることをもって本分とし、如何にブラブラしていようと、安直に親の領域である店や畠の手伝いなんぞさせてはいけない。（そのことを彼は貧の中にも、画家志望である自分の息子で実践した）

このように山岸ズムは条件的真実を重んじるのであり、各個の生態を生態のままに生かそうとする。生態が生態のままで生きることが即ち、自然であった。このことについては「自由と平等」の問題として再説するが、要するに山岸ズムは根本的には、無辺境と無限界の全宇宙的世界主義（コスモポリタニズム）に立脚しながら、現象的には境界と限界の各個別的個人主義（インディビジュアリズム）に貫かれていて、いわば両者の組み合わせなのである。

この個別と世界を重んじ、家族、民族、国家という類的段階を重んじない考え方を、社会にまで延長するとどういうことになるか。結局、アナキズムということではないか。

いや、アナキズムではないかというより、初めにアナキズムがあって、その山岸流解釈として、こういう独特にして有効な考え方が生まれてきたのではないかと推される。

そう思ってみれば、もともと彼は社会主義者であった。若い頃には官憲の眼を逃れて逃げ回り、何度も検束、留置されている。その当時の社会主義であるが、一体それはどんな種類の社会主義であったかといえば、マルクス主義に非ず、アナキズムであったということになる。

彼自身は母親を讃えて、「ぼくはヤクザの団体にも、共産党にも入っていたが、母親は何ともいわなかった」と述懐しているし、共産党幹部であった佐野学と知り合いだったと書いている人もいるのであるが、戦後ははっきりソ連、中国の共産主義を否定していたし、彼の統制と拘束を好まぬ自由な性格からいっても、到底権力主義的ボルシェヴィズムはとり得るはずがないのである。たとえ一時的入党はあったにしても——。

第一、時代相からいっても、青年巳代蔵が上京し、帰郷した大正七、八年から十一年にかけてはアナキズムの勃興期から最盛期にかかる時期である（暁民共産党結成、大正十年）。大正七、八年頃には

印刷工を中心とするアナキズム系信友会が急速に頭角を現わし、次々に争議を起こし、大正十一年にもなると、その浸透力は単に印刷工、機械工にとどまらず、また、東京、大阪のような大都市においてだけでなく、至るところに広まるのである。

その一端を証明するに、一九二二年（大正十一年）一月、モスクワでコミンテルン主催の極東民族大会が開かれたが、この時の日本代表出席者は、ボル系二人に対しアナ系十人と、はるかに多かった。コミンテルン側の日本社会主義運動の認識は、到底アナ系勢力を無視することができなかったのである。

むろんこの期の日本におけるアナキズムの頭領格は、一代の風雲児といわれ、関東大震災に際して虐殺の悲運に見舞われたかの大杉栄である。青年巳代蔵は果して大杉栄と出会ったかどうか、不明であるにしても、大杉栄らの生活行動及び理論には大いに動かされていたはずである。むろん外国のアナキズム文献にも大いに接触したであろう。この頃が山岸の最多読書期であり、万巻の書を読んだといわれる時期である。

2

山岸ズムが最も露わにみえているのは、山岸生活体の在り方そのものである。

山岸会には長というのがおらず、規約や規則といったものがない。規約、規則がない以上、何時に起きて何時に寝なければいけないの、何時間働かねばならないのということもない。また、ここでは金というものを必要とせず、係は半年で自動解任ということになっているので、容易に特別の権力が

育つ仕組にはなっていない。

アナキズムということは一言でいえば、無権力主義ということであるが、人は無権力において各個は自由となる。そうした自由と解放の思想が山岸会には、随所に機構として仕組まれているのである。

機構としてあるばかりではない。実は彼の社会構想の基本原理をなす共存共栄＝共生共活の考え方そのものが、生態論（エコロジー）というよりは、バクーニンと共にロシアの著名なアスキスト、P・クロポトキンの『相互扶助論』を下敷にして考えられているということである。自然社会における共存共栄を人間社会にまで適用させたというのも、基本的にはこの本が基をなしていることである。

クロポトキンは若い頃、東シベリアと北満州（現中国東北部）を旅したことがあるが、その時、たくさんの動物を観察した事柄から、彼は相互扶助と相互支持こそ、生物の持続とそれぞれの種の保存（進化）にとって最も重要な役割を果したのではないかと考えるに至った。その後、クロポトキンはダーウィン主義と社会学との関係について関心を持ち、いろいろな著作物を読んだが、どれ一つとして自分を納得させるものがなく、なんと通算十三年間かかって、徹底して相互扶助の科学的事実を調べ上げた。その「目次」だけ眺めると、「第一章　動物間の相互扶助」に始まって、「野蛮人間の相互扶助」「未開人間の相互扶助」「中世都市の相互扶助」とつづき、最後は「われわれ自身の相互扶助」で終わっている。

その間、無数といっていい自然界と人間史上の扶助の例証を挙げ、「このように社交性と相互扶助と相互支持の要求とは人間性に固有のものであり、したがって生き延びようと互に争いながら、小さな孤立した家族をなしている人間など、歴史上のいかなる時にもお目にかかれない」（「第五章　中世

都市の相互扶助」）と書いている。

この『相互扶助論』の全訳が出たのは大正六年、大杉栄訳であって、当時の思想界にあっては大きな影響を与えた。思想界に衝撃を与えたのみならず、運動と結びついているために、相互扶助の考え方は日常的にもくい込んでくる。例えば飲み食いの支払いに至るまで、全員均等に払うというのではなく、持てる者が支払い、持たざる者はタダで飲み食いしてかまわないということになったりした。

若き日の山岸巳代蔵もまたこうした雰囲気の中にあった一人であり、その社会構想のパン種はもとを質せば、クロポトキンの『相互扶助論』にあったとせねばならないのである。

ただし、ここでそれならば、山岸ズムの正体はアナキズムであるかといえば、直ちにそうもいえない。山岸ズムにはもう一つ柱があって、それは仏教、具体的には禅である。いや、二つの柱というよりは源流をなすのはむしろ仏教（禅）で、源流から発して社会に及んだところでアナキズムになった。

この仮説的断言には、山岸ズムを知る多くは賛成されないかもしれない。事実、本人自身が山岸ズムは宗教ではないと、口をすっぱくしていっているのである。『実態』でも、「宗教に非ず」の項目で、「山岸会の行為を、宗教だと早合点する人があります……会としては、凡ての事柄について、衆知を集めて、よく検討し、最高・最善・最終的なものを見極めて、それを実践し、理想社会の実現を期するもので、修養会や、宗教的なものではありません」と否定している。

しかしそういう当人自身、幼年の頃、母に連れられて行った寺院に郷愁を覚えるとし、春日時代には麓の春日神社に参詣している。ことに伏見稲荷を信仰（？）していた模様で、戦時中、獄につながれた際にも、千代吉に「あんなことでよう辛抱できたのは、伏見稲荷のお陰や」といっていたそうで

ある。

運動が始まってからも、仏教書を読んだ。禅を勉強したもんで……などと、周囲の者にいくらも語っているのである。そうしたことばを聞いた一人である奥村きみえは、次のように山岸を懐古している。

「先生は仏教については、釈迦は偉いぞ、釈迦は偉いぞと何回もいっておいでた。釈迦は王家の家柄に生れて、森羅万象、一体であることに気づいて家を出られた。ただその真理をこれが真理だと教えるのではなく、ただ黙って真理を指さすみたいなところで見届けた人やというておられた。

自分のこととなると、俺は百姓の小倅に生れた。立場が釈迦と同じに生れていれば、拡大拡大なぞといわなくとも研鑽にぞくぞくと集まってくるものをと、口惜しさみたいなものを感じておられたようだ。しかし釈迦には一抹の寂しさがあったろうとも……。それから禅宗と禅とは異なる、禅そのものは研鑽なんだ。キリストはキリストで、あれでいい。みんなが嫌うことはしなくていいし、逆らう必要は一つもないんやと……」

こうなると山岸のいう「宗教に非ず」は、如何ように解釈したらいいのか分らなくなるのであるが、それには幾つかの理由があって、彼は何かわけの分らぬものに心惹かれ、敬虔な気持を抱いていた（四次元的現実の不可思議さを信じていた）。性来の孤独多情の故にか、「人間には心の願いというものがあるんやから」、「宗教も無下にはできない」としている。それで社（やしろ）や寺院の前を通りかかれば、静かに合掌礼拝し、祈願していたが、一方では宗教を即信仰なりとしていた。

宗教即信仰と捉えればこそ、大問題としたのである。

山岸は常々「信ずるな、信ずるな」といっていた人である。なぜなら、彼は真実の探求をもって建

前としていたからである。仮にそれが九九パーセント正しいとしても絶対正しいとせず、なお探求する必要があるといっていた。そんな態度に信仰が不必要なのは当り前である。

それならば宗教から信仰を抜いたならば、どうか？　もしそれが成り立つならば、宗教もまた認め得るということになるが――。山岸も「一般には宗教と思われていても、頑固な教義を持たないで、その考え方の大宗までも、真違っていないと頑張らずに、正しいかどうかを再検討し、改廃していこうとする謙虚なものは、宗教だとは思っていません」（「宗教・信仰は百害あって一利なし」）といっている。それに適合するものが仏教にはあった。

釈迦も禅も一まとめにして仏教としていうなら、仏教の原義はよくいわれるように、「自覚の宗教」であって、キリスト教あるいはイスラム教のような「神の宗教」ではない。仏教はヘブライ的一神教に対立するものとして、人間が生命的存在であり、自己の生命に永遠無限なる法（ダルマ）を自覚したことから出発するが故に、「自覚の宗教」なのである。

それは語源的にもそうなので、仏教の仏というのはサンスクリットのブッダを訳したもので、意味は動詞の「目覚める」から転じて、「目覚めた人＝覚者」の意である。何に目覚めるかといえば、今もいうように森羅万象のことごとくを法（ダルマ）ととらえ、その法を自悟した人のことをブッダ（仏）とするのである。その故に超人的神の存在を信じて、神との対話の中で初めて成り立つような宗教とはまったく異なる。

釈迦は法の自覚を教えた人であり、中国の老荘思想と結びついて再浮上してきた禅にあっては、知性と生活が強く押し出され、殆ど信仰臭といったものが感じられない。ことに既存の老師たちの祖述を順法しようとする曹洞宗に対するに、公案工夫の階梯を坐禅を行ずる者の心性に問い返そうとする

臨済禅にあっては、近代的哲学、諸科学の対象となるほどに非宗教化しているのである。

ここにおいて山岸ズムは、その発生点において、仏教（釈迦→禅の流れ）と深い関りを持たざることを得ないことになった。仏教また根源的には科学哲学であり、釈迦は人間が考え得る限りの最高の思索をなした。山岸の著述「宗教に非ず」にもあるように「最高・最善・最終的なものを見極めて」、実践するのが山岸ズムであるから、背景に釈迦の深淵な哲学が入り込んでくるのが必然ということになる。

繰返していえば、山岸は信仰を排した。そして、「東洋的思想の禅、禅学と禅宗とは同じでない。釈迦と仏教も無論違う。イエス・キリストとキリスト教ともやはり違うのではないだろうか」（「声明書」昭和三十五・四・十二）といい「ヤマギシズムと山岸会とは同じでない」（同前）と述べていた人である。祖述者と後世亜流の説や在り方とは、厳然として区別していた。

逆にいうなら山岸は、この文章からもうかがわれるように、東洋思想の禅、釈迦、イエス・キリストを大変評価していた。大変評価するのみならず、究極において依って立つところは禅と釈迦であった。そこに、山岸ズムが奥へ進めば進むほど測り知れない深さを持つもののごとく感じられる理由があるし、極めて単純明快な答えが用意されている反面、いかに聞いても不透明、不明瞭のそしりをまぬがれない理由がある。山岸自身また口ごもり、容易に表現し得なかったのも肯ける。

これをいうならば、山岸ズムは内容的には、概略〝仏法社会主義〟ということになる。〝仏法社会主義〟であればこそ、近似社会思想としては、自由と無強権のアナキズムが挙げられることになる。（禅哲学者・鈴木大拙は、仏教は社会化すればアナキズムになると語る。一方、アナキズムでは釈迦、キリスト、老荘をその源流として挙げる）

アナキズムはまた、自然科学を依りどころとする。

なぜなら、アナキズムは本来民衆の生活史の中に起源を持つものであって、大学や図書館で生れたものではないが故に、あらゆる学問研究や哲学体系から独立するものである。ことに、社会科学のような年若い学問を信用しない。仮に信用するとなれば、それは自然科学であって、自然科学ならば社会科学より遙かに古い歴史を持ち、確実度の高い学問と考える。それ故に理論の立証性として自然科学をとり、自然の導き出す法則に努めて従おうとしているのがアナキズムである。

ただし、自然科学の法則といっても、法則はすべて置かれた条件によってしか成り立たない。条件が変わると法則も変わり、範疇が広くなればなるほど法則の抽象度が高まり、より高い段階の法則となる。とどのつまり万物万象、全宇宙を貫く法則は何かとなる。その法則によって、人間はおろか動物、植物、無機物に至るまでの一切が支配され、一瞬たりとも抜け出ることが許されないとあれば、人間は素直にその理法を認め、理法に生きるのが最も賢明な生き方とならざるを得ない。

この宇宙万物を貫く広大無辺の真理を求めたのが釈迦であり、釈迦はこの世は苦の娑婆であることに気がつくと、自分の置かれている環境を捨てて山に入った。山に入ってどうしたかというと、最初は知性哲学に頼って解決を求めようとした。しかしそれが至難と分ると、今度は難行苦行の禁欲生活を始めた。頭脳でダメなら肉体でというわけである。だが、これでも解決がつかなかったものが、ある日、暁の明星を見て突然悟ったといわれる。

星と自己とは「不二一体」であると――。

「不二一体」は同時に空において成り立つが、某仏教者はこの釈迦の悟りからする万物の理法を、次のように解説している。（注2）

第一　万物万象は肉眼で見るような姿で実存するものではない。一切空である。
第二　この世のすべては決して固定的に常住するものではなく、つねに変化し、生滅して止まないものである。
第三　孤立して存在するものは、この宇宙には一つとしてあり得ない。
第四　宇宙は絶え間なく流動し創造しているが、同時に全体からみれば、一つの大きな調和を保ち、秩序をなしている。
第五　人間は空において平等である。しかし平等は千差万別のまだらを生み出す。
第六　宇宙の万物が唯一絶対の空であるから、地球上のすべては兄弟である。
第七　自と他は一体であるからして、自己は同時に他者になることができる。
第八　物と心は別々のものではない。物心は一如であり、不二であるのが真相である。
第九　われわれは宇宙の実在と一体であり、その実在に生かされているのである。
第十　身体に生命が宿っているのではなく、生命が身体をつくっているのであり、宇宙の生命力即空がつくっているのである。

釈迦の説いたとされるこの十大理法は、そのこと自体を知るためにさらに多くの紙幅を要することであろうが、何と山岸ズムの考え方と酷似していることか。恐らくは山岸は〈空〉を含めて、この十大理法の全部を認めたことであろう。認めたればこそ「釈迦は偉いぞ」となる。

私は、この山岸ズムが大自然の摂理から発するものであることを、福里ニワの個人的な特講によって知ることができた。私はそれを聞いて、急に胸のつかえが降りたように感じたものである。不遜ながら、山岸ズムの根幹をなすものが分った気がした。改めてニワに、「それでは山岸ズムは自然主義、

自然哲学なんですね」というと、即座に「そうなんですよ、山岸ズムは自然主義で自然哲学なんですよ」という答えであった。

そういわれてみると、山岸の書いている文意が一層よく分るし、当人が軽くいなしたいい方で語っている言葉にも肯けた。彼は帰郷した際に、友人に、「ちょいと自然というものを考えたら、こんな結果になってしもた」と洩らしているのである。ただしこの自然哲学の発祥を仏法とアナキズムに求めたのは、私の勝手な推論に依るものではある。

先に述べた山岸ズムは、究極〝真実〟に至るというのも結局そういうことである。この世の無数の真実の行きつくところ、〝大自然の真実〟となり、無数の真実の真実であるか否かの判定は、〝大自然の真実〟に照らし合わせることでしか可能でない。山岸ズムとはと問われれば、曰く「真の人間性の復帰」「無所有・共用」「絶対愛和」「求真性」とか「全人永遠真の幸福」「物心豊満生活」「財布一つの村づくり」等々と並べられたりするが、それらはいずれも本体の側面でしかない。

一つ原理の主として社会的場面での応用編が、これらの諸真実となるのである。

山岸巳代蔵を表題のごとく「真人（しんのひと）」と呼ぶのも、その意味である。山岸は〝真実〟の思想故に悪意で判断してもらっては困るが、好意でみてもらってもありがたくないという。要は善悪の問題ではないのだ。山岸巳代蔵また人のいい「善人」に非ず、人間真実に生きる「真人」なりというわけである。（表題の「真人」は山岸巳代蔵が昇天した折に、「全人の父真の人山岸巳代蔵」の文字が墨書されたところからとったものであるが、禅家の「無位の真人（しんにん）」といういい方に対されたものか）

山岸は、この天地根源の大真実を教えるのに、「大ばかものになれ」とか、ときには「たかが人間やないか」と却って人間を卑しむるようないい方をする。これは、人間が世界の大真実を知るために

は、大真実そのことをいくら直接的に尋ねてみても駄目なので、その以前の世界に対する〝態度〟の必要性を説いたものである。

なぜなら、この世の大道を知ろうというのに、自己の小利口さにひっかかっていては、道は見えるはずがない。須く己れの小賢しさを捨て、自己というものをゼロにしてかかることが肝要である。真偽を判断するのは、そのあとでよいだろう。そこで己れを虚にする、つまり「ばかになれ」というわけである。「ばか」、それも「大ばか」になれば、「利口」には見えないものが次第に薄明の中から見えてくる。それが即ち真実の大道である。

現在、山岸会でもことごとに「ばかになれ」と説き、「利口者」が排されるのも、この故である。「たかが人間やないか」も同じ意である。地球の前には人間の存在は、小さなものでしかない。地球ですら宇宙的規模でとらえれば、問題にならないくらい小さい。そんな風塵にも足りないような小さい人間が、大きな顔をしている。大体、人間は動物より人間の方が偉いと思っているようだが、動物の眼からすれば、人間もやはり動物にすぎない。

それ故人間よ、お前は自然に対する思い上がりや傲慢さを捨てなさい。自然の前にはもっと謙虚で素直でありなさい。そうすれば自然は大らかに自分の胸を開いてくれるだろう。自己を捨てれば、すべてのものが自己となるのだ。

同じく山岸会で、タイプとして、温和で、肩ひじを張らない、人の話がよく聞けるような人間が求められるのも、この道理による。

釈迦は、このような小我を捨て、大我についた「自他一体」の世界を指して、「諸法は無我である」といった。諸法とはもろもろの存在であり、それが無我というのは、すべては持ちつ持たれつの関係

において存在するので、それ自身に固定した自性（実体）はないということである。在るのは無我、無自性のみ。他との連関、歴史的連続性や社会的連帯性を持たないものなどありはしない。孤立した唯一無上の我などというものは、単に観念上想定できるだけのもので、実際には存在しないものである。故に「万物一体、天地同根」となる。

「そんなこといったって現にここに、生身の私という肉体があるではないか」という人には、それでは、お前はどこから生れたのか、その生みの親の親は、またどこから生れたのかと問いかけられる。私が最初からこの世に居たわけではあるまい。また肉体を維持してゆくためには、じゃがいもなり、豚なり食べねばならぬが、それならば、お前の肉体はじゃがいもや豚の生れ代りではないか。お前とじゃがいも、豚とは兄弟である。

ただしここで仏教は、同時的に逆転を起こす。「色（事物）即是空」ではあるが、「空即是色」（「般若心経」）でもあるとなる。否定と肯定とは一枚の銅貨の裏表の関係となっている。裏がなければ表もない。こういう個体と個体の関係を仏教では、「自他不二」「不二一体」といういい方をするのであるが、二でなければ最初から一といえばよさそうなものが、それがそうではなく、「二に非ず」というところに、何ともいえぬ仏教的深みと妙味がある。

もっとも釈迦はこの論理を凡夫にわかり易く、一度差別（個体）の現実を否定して一切平等（一体）としながら、さらにもう一度否定して自他差別の世界を認めるというふうに、二段構えの手続きをとって教えているのである。

個にあって個に非ず、個に非ずして個、即ち「超個の個」を山岸ズムでは、「有境の私の考え、在り方でなく無境の私であり、無距離、無時間、無辺境、無中心の宇宙自然の無境の公人の私」などと

いういい方をするが、実体的内容は殆ど同じものである。

そして「超個の個」の人間研究において、仏教の中でも一番この問題と取り組んできたのは禅である。山岸は来るべき理想社会の基をなす人間問題について、大幅に禅にお世話になっているのである。その理想とする人間像から人間形成の法に至るまで。もともと禅は知的な要素を持ち、生活への具現化を要求してやまないものであるが、それを山岸は自己流にやったまでである。

ここまでいうとある人は、山岸ズムを日蓮系の創価学会や立正佼成会と同列にみられるやもしれない。彼らもまた〝仏法民主主義〟を持って立っているのであり、先に挙げた釈迦の十大理法の解説も、実は立正佼成会会長・庭野日敬の文に借りたものである。しかしこの点においてこそ、山岸ズムは「宗教に非ず」であり、宗教教義の一切にとらわれないのであるが、山岸ズムが基本的には仏法とアナキズムを換骨奪胎しての〝組み合わせ〟であることもまた確かである。

仏法とアナキズムの組み合わせのみならず、よくよくみれば、部分においてはいろいろな人の思想やアイディアが取り入れられている。第一項に山岸と酷似した福沢諭吉の言を挙げておいたのも、その意味を含んでのことである。

このことは山岸自身が認めていて、「私の発明したものは一つもない」と洩らしている。

その実証はやはり山岸式養鶏にあるのであって、彼が発明したと考えられている革命的技術の数々は、もとはといえば他の人が考えたものである。「山岸養鶏に関しての一切も皆それらから得たもののみで自分の何物もありません」(会誌「ボロと水」)。例えば、彼は生魚屑ともみがらで雛を飼育できるとしているが、これは、柴田九内のもみがら養鶏を取り入れたものであるし、雛を温かい寝床と寒い餌場を往復させて丈夫にさせるやり方は、斎藤虎松のスパルタ育雛法に習ったものである。また厳

寒期といえども六十度以上に発熱して、絶対火事の心配のない藁の踏込み式暖房も、彼にヒントを得て改良したものである。

とすれば、山岸ズムはまるで人に負っているではないかといわれれば、「それはそうだろう、この世に人に負わない何ものもあるものではない」となる。フロイドはダーウィンに負い、ダーウィンは古代思想家に負っている。同様にクロポトキンはケスラーに負い、ケスラーはゲーテに負っているのかもしれない。みな相互依存でしかない。しかし、それでは山岸に、発見は一つもなかったかと問われれば、むろんそんなことはないので、むしろ独特な創見が随所にみられる。

山岸は部分的に最高のものを組み合わせれば、全体として最高のものが生れると考えていたのである。それの証明をなしたのが山岸養鶏であった。能力の劣った自分がその道の最高に達するには、下手な考え休むに似たりで、最高のものを忠実にコピーするに限る。おいしい料理をつくる料理人になりたければ、名コックのやり方をそっくり真似るにしくはないとしていた。

それが科学的、合理的、省力的方法というものであり、最高の真実である限りにおいて、完全な模倣即最高の文化遺産を受け継ぐことにほかならない。

山岸のこの略奪と組み合わせの論理自体、あるいはその方の大名人K・マルクスに倣ったものかどうか、そこまでは推論しかねるとしても、ともかく彼は最高と信ずる方法論に基づいて、他人には、最高最善の自分の養鶏書に「盲従」することを要求し、自己は人類の最高最善の人釈迦に盲従せんとした。釈迦は「一切衆生悉く我が子である」と説いて、人はいうに及ばず動植物にまで親としての慈悲を注いだのであるが、彼また釈迦を忠実に真似て、蠅、蚊に至るまで愛情をかけたのである。

同時に釈迦が自分の哲理に基づいて、この世に具現化しようとして果せなかった無念さを、二十世

紀の日本に住む自分の双手によって何がなんでも齋さんとして事を急いでいた。

（注1）「真理、Satyaなる言葉は、satからきたのである。satは存在更に実在を意味する。そもそも物の本質を究明すれば、世の中には何物も存在しないのである。存在するのはただ真理だけである」（『ガンジー聖書』）

（注2）釈尊が「この法こそ私の発見した、私の思想の中心だ」といって印を押したという「四法印」は次の通りである。

一、諸法無我（一切のものに自我性はない）

二、諸行無常（一切のものは絶えず流動変化する）

三、一切皆苦（物事に執着するのは苦しみの因だ）

四、涅槃静寂（欲望調節するところに真の平和がある）